



風は海から

令和3年11月30日
令和3年度
横浜市立西富岡小学校
学校だより 12月号 No.8

いろいろな視点から見ること

横浜市立西富岡小学校
校長 黒田 由希子

立冬を迎え、時折り吹く木枯らしに冬の気配を感じる季節となりました。

先日、三浦の城ヶ島公園で「こも巻き」が行われたという記事を見ました。この記事を読み、懐かしく思い出したことがあります。

私が初めて教員として赴任した学校は、丘の上にあり、自然に囲まれた学校でした。夏になると、子どもたちは木の幹に傷をつけて樹液を出し、そこに集まってくるカブトムシやクワガタを採ることを、とても楽しみにしていました。しかし、私も子どもたちも、自然だと思っていた木々は、実は造園業を営むIさんが、世話をしているものだったのです。当然、Iさんにとっては迷惑な話で、夏休み前の朝会で、「学校の周りがある木は売り物の木なので傷をつけないように。」という校長先生からの注意も毎年の恒例行事となっていました。そこで、せっかくこのような環境にあるのだから、3年生の社会科の生産単元をこの造園業を取り上げてやってみてはどうだろうかと考え、教材化することにしました。Iさんに取材をしていく中で、なるほどと思ったのが冒頭の「こも巻き」の話です。冬が近くなると、松の木にわらで編んだ「こも」を巻く作業を行います。いったい何のために巻くのでしょうか。子どもたちは、「冷たい風で枯れないように巻いているんじゃない?」「腹巻みたいに木を温めているのでは?」など、たくさん予想していました。Iさんを教室にお呼びして聞いてみると、「松の葉を食べてしまうマツケムシを温かいこもの中に誘い込んで、春になったら、こもと一緒に外すことで木を守っているんだよ。」と教えていただきました。大切な松が虫に食べられてしまわないように、人の手で一本一本丁寧にこもを巻く作業を行っていることを初めて知りました。この学習をした子どもたちは、Iさんの造園業に対する思いを受け取り、虫取りのために木を傷つけることが次第に少なくなっていました。

社会科では 社会的事象を通していろいろな見方考え方を学びます。西富岡小学校では「**自ら問いを見つけ、本気で考えを深めようとする子どもの育成**」をテーマに、予測不可能な社会に対応する力、自らの生き方を社会との関わりの中でつくっていく力を育てていこうと、日々授業改善に取り組んでいます。一見何でもないように思えることでも、その裏側にたくさんの人の思いや願いが込められていることがあります。これからも、西富岡小学校の子どもたちが、いろいろな視点から事象を見つめ、その意味を問いながら、自分と社会のつながりについて学んでいくことを期待しています。